

19 世紀朝鮮における儒教とカトリックの喪葬礼の比較研究

－祈祷文を中心に－

李孝振(ソウル大学)

1. 序論

喪葬礼は、人間の最後の人生儀礼として死んだ人が新たな世界へと渡れるように手助けする儀式である。このような側面から喪葬礼とは現世において生を終えた亡者が次の段階へと行けるよう手助けする通過儀礼である。朝鮮で葬礼とは家礼に属する儀礼で、決められた手順を厳格に守り実践すべき儀礼であった。朝鮮は儒教を統治理念とする国家であったため、儒教が当時の主流文化を成しており、喪葬礼もまた儒教の礼法に基づいて執り行うのが一般的であった。しかし 18 世紀にカトリックが受け入れられたことにより儀礼の転換¹がなされたのである。

19 世紀初めにも朝鮮でカトリックの信者がカトリックの作法に基づき礼式を執り行ったという記録が残っているが、公式的なカトリックの喪葬礼式書は 19 世紀の中盤に刊行された。『天主聖教礼規』²という名で刊行されたがカトリックの喪葬礼式手順及び祈祷文が収録されており、儒教式の喪葬礼を批判する内容も含まれている。特に喪葬礼式で使用される祈祷文に「煉獄」³という新しい概念が登場するのだが、これはカトリックが伝えられた以後新たに登場する来世間で、既存の礼式とは区分される重要な要因として作用した。これ以外にもカトリックの喪葬礼式に変化が起きた時点がある。両伝統の喪葬礼式は死んだ人のための儀礼であるが、カトリックの喪葬礼では亡者が祈祷を受ける対象ではないという点である。本研究は 19 世紀中葉に編纂された儒教とカトリックの喪葬礼式書に収録されている祈祷文を比較し、カトリックの伝来以降に起きた祈祷対象の変化について議論する。

本研究では儒教の礼式書である李緯の『四礼便覧』とカトリックの『天主聖教礼規』に収録されている二つの祈祷文を取りあげる。これらの礼式書はそれぞれ 1844 年と 1864 年に刊行され、ほぼ同時代に使用された礼式書であると言え、各伝統を代表する礼式書であるため比較対象として適切であるといえる。儒教とカトリックの喪葬礼を扱った先行研究は、それぞれの伝統レベルで喪葬礼式を分析し、死生観・霊魂観を中心に二つの宗教を比較している⁴。儒教の喪礼は亡者に捧げる祈祷であり

¹ 1791 年の珍山事件のことである。カトリック信者であった尹持忠と権尚然が尹持忠の母親の葬儀を執り行う際に儒教の礼法に従わず、神主を燃やし祭祀を廃止した廃祭焚主事件であり、儒教とカトリック間で初めて儀礼の衝突が発生した事件である。

² 原題は『뎨쥬성교례규』であるが、現代の韓国語の発音に基づき『천주성교예규』と表記する。

³ 煉獄はカトリックにおいて第三の場所、地獄と天国の間にある場所または状態を意味する。12 世紀に煉獄の概念が形成されスコラ哲学によって体系化されたが、煉獄という観念は 1170 年以前には清めの火という用語で表現され、その後 purgatorium という清めの場所としての煉獄が文法的に使用された。Le Goff, Jacques. La naissance du Purgatoire. Paris: Gallimard.

⁴ 儒教の喪礼と死生観に関する研究としては劉權鍾、「儒教の喪礼と死の意味」、『哲学探求』16 (2004): 5-32; Lee, Yong Ju, 『死の政治学: 儒教の死の理解』、2015 等がある。カトリックの喪礼に関する研究は Huh, Yoon Suk, 「韓国カトリックの喪葬礼文化の土着化」、『司牧研究』10 (2002): 148-182, 「1614 年『ローマ礼式書(Rituale Romanum)』からみる『カトリック聖教礼規(1864)』の葬礼に関する考察」(博士学位論文、カトリック大学、2014)等があり、儒教とカトリックの喪葬礼を比較した研究には Hwang, Young Sam, 「韓国カトリックの『喪葬礼式』と韓国伝統喪葬礼に現れる死の理解」(終始学位論文、大邱カトリック大学、2005); 李完熙, 「Dies Natalis(天上誕日)の伝令のために: 韓国のカトリック、仏教、儒教の葬礼式式の比較研究」、

‘ritual to’の性格を有するが、カトリックの喪礼は亡者のための祈祷であるという点で‘ritual for’であると、崔鍾成は言及している⁵。本研究では、儒教とカトリックの喪葬礼式での祈祷文の比較を通じ喪葬礼式における祈祷対象と行為者の関係に注目し、対象が目的へと変わっていった過程について議論する。

2. 祈祷の対象

儒教式の喪礼は大きく 19 の手順から成り立っており、3 年という長い期間に渡り執り行われた。7 巻から構成される『四礼便覧』のうち 4 巻が喪礼に関するもので、礼式の手順が複雑であることがわかる。これに対しカトリック式の喪礼は 6 の手順から成り比較的簡素に執り行われ、儒教の喪礼が埋葬後にも小祥忌と大祥忌等の祭礼を行うのとは異なり、一年に 4 回決められた日に死んだ者を追悼し祈祷を捧げるだけである。それ以外にも儒教とカトリックの喪葬礼式の間にはさまざまな差があるが、最も注目すべき点は祈祷を受ける対象が違うということである。儒教とカトリックの喪葬礼式書に収録された祈祷文からもその差は明らかである。

祈祷文には祈祷する行為者の要望が含まれていて、祝願を聞く対象が設定されている。儒教とカトリックの喪礼は共に死んだ人を対象とする儀礼であるが、それぞれの礼式に参加する人々が祈りを捧げる対象には差がある。儒教の喪葬礼では治葬（埋葬先で儀礼をして合わせて墓を決める段階）する際、土地神を祀るということを除けば祈祷を受ける対象は亡者であるが、カトリックの礼式では祈祷の対象は亡者ではない。カトリックの信者は、亡者でない、天主とイエス、マリア、聖人に祈祷を捧げた。つまり、カトリックの喪葬礼式では、死んだ人ではなく、神と聖人が祈祷の対象となるのである。

『四礼便覧』に収録されている祝文の対象には大きく分けて死んだ人、祠堂にまつられた先祖、土地神が含まれているが、どれが対象になるかによって内容と構成が変わってくる。全ての祝文をここで取り扱うことはできないため、一定の書式に沿って亡者に祈祷する祝文に関し検討する。

維 年號幾年歲次干支幾月干支朔幾日干支 孤子某 敢昭告于 顯考某官封諡府君⁶

時はまさに(年号何年何月何日)恭敬する父を亡くした(名前)が申し上げます。⁷

これは埋葬の段階で亡者の神位を魂帛から神主へと移動させるときに読む祝文の始まりである。祝文は祝を読む日にちと自身の官職及び名前を明らかにして祈祷の対象に告げる形式で始まり、祝願の内容と亡者を失った悲しみを表現し、準備した祭需（祭祀〔神や祖先を祀る儀式〕の時、特別に準備する料理）を捧げる。一定の形式に沿った祝文はこのような構造をしていて、全てが祈祷をする人と受ける対象という二つの層から祈祷の主体と客体が分けられる。このように儒教の喪礼では祈祷を受ける対象は亡者であったことを確認することができる。

一方でカトリックの喪葬礼式で使用される祈祷文の数は儒教の礼式よりも少なく、それぞれの手順で

『World and Word』24 (2008): 156-194. 等がある。

⁵ 崔鍾成、「朝鮮時代の死生観と死者儀礼：死者儀礼の動因と志向」、『韓国人と日本人の生と死』。東北亜歴史財団・韓日文化交流基金編纂、景仁文化社、2015、163-179。

⁶ 李緯、『(韓国語訳)四礼便覧』、李鍾燦訳、梨花文化出版社、1992、343。

⁷ 李緯、『(韓国語訳)四礼便覧』、145。

毎回異なる祝文を読む儒教の礼式とは違い、決められた祈祷文を繰り返し唱えるという特徴がある。

『天主聖教礼規』には詩篇、煉獄祷文⁸、祝文、煉霊のための賛美経（主への賛美）等が搭載されている。煉獄祷文は継応（交唱）構造から成り立っており、煉獄の苦痛にある亡者のために神と聖人に請願する祈祷である。祝文は祈祷する人と亡者との関係により「死んだ親のための祝文」、「死んだ師弟のための祝文」、「死んだ兄弟・親戚・恩人のための祝文」、「死んだ全ての交友のための祝文」に分けることができる。祝文の内容に若干の差はあるが、全て死んだ者のために天主、マリア、聖人に捧げる内容が含まれている。賛美経もまた煉獄にいる死んだ霊魂が煉獄の刑罰を免れるよう、イエスとマリアを賛美し彼らに捧げる祈祷である。結局、儒教の喪葬礼式では歆饗（霊魂が祭祀のお供物を食べる）の対象である死者が、カトリックの礼式では祈祷の対象ではなく、祈祷により霊魂の救済を受ける対象へと置き換えられたのである。このように祈祷の対象が変わったのは、結局祈祷を受ける対象と祈祷をする行為者の関係もまた転換したということの意味する。

3. 喪葬礼式と祈祷の目的

前章で検討した祈祷文を通じ、儒教の礼式では祈祷の対象であった亡者がカトリックの礼式では対象ではない目的となったということを確認することができる。これを解明するためには喪葬礼式の目的に関する議論が必要である。祈祷の対象が変わったということは、行為者と対象間の関係のみでなく、礼式の性格もまた変わったということを表すのである。

儒教の喪葬礼式は、単純に死を処理する手順ではなく、死んだ祖先に対する孝と恭敬を実践する儀礼であり、祖先への祭事を行うことにより死後にも孝の実践が続くようにする儀礼である⁹。このような観点から儀礼の主体は哭することにより亡者を失った悲しみを表現し、死んだ人に祭を捧げる段階が重要視された。しかしカトリックの喪葬礼式では、祖先に対する孝の実践ではなく救済の要素が強く現れる。これにより儒教礼式とは性格が違い、礼式で使用される祈祷文の内容もまた顕著に違う展開となる。カトリックでは死んだ信者の霊魂のほとんどが煉獄という中間的なあの世を経てから天国に移動するとしている。カトリックの喪葬礼式の代表的な祈祷文である煉獄祷文はその名から内容を予測することができるように、煉獄にいる霊魂のための祈祷である。また、祝文や賛美経をはじめとする祈祷文でも煉獄にいる霊魂の安寧のために祈祷する内容が主に扱われている。要するに、カトリックの喪葬礼式は煉獄にいる霊魂を救済し天国に行けるようにすることが目的であるということができる。

儒教とカトリックの喪葬礼は、両方とも死んだ人を対象とする儀礼であるが、儀礼的な実践に内在している意味は全く違っている。儀礼に投影された二つの宗教の死後世界への理解が相違するためである。儒教は具体的に来世に関するイメージを提示しない。人が死んだら気は散り、魂は天に昇り、魄は地に帰るとしている¹⁰。一方でカトリックは「地獄、煉獄、天国」という明確な来世観を確立しているためこれを祈祷文に反映することができた。また、カトリックには人間と死んだ人の霊魂を主宰する超越的な神が存在する。その結果、前章で検証した儒教式の喪礼祝文では死者と生者の関係のみ確認することができたが、カトリックの祈祷文では、死者と生者以外に、超越的存在である神の介在

⁸ 煉獄祷文は現在「慰霊祈祷」と称される。

⁹ 劉權鍾、「儒教の喪礼と死の意味」、8-9。

¹⁰ Lee, Yong Ju, 『死の政治学：儒教の死の理解』、114-115。

가確認できる。神という絶對的な存在が、死んだ人の過去の行跡により、その靈魂がしかるべき場所に行くことを決めるため、カトリックの信者は、死んだ靈魂のために祈りを捧げることができるだけで、亡者に直接的に何らかの行為をすることはできない。また、死んだ人は自身の犯した罪に関して自ら贖罪することはできず、他の信者の援助によってのみ罪を償うことができる。よって信者は死んだ人に代わってその靈魂を救済するために神に要請しているのである。しかし儒教ではカトリックのような神の概念は存在しない。人が死んだら魂と魄は分離するが、その魂は煉獄のような他の世界には移動せず神主という物理的な場所に依託される。そのため儒教の礼式では死んだ人と同じ空間に現存していると思われ、彼らのために何者かに祈祷を捧げる必要はないのである。

4. 結論

本稿では、カトリックが受容された以後、19世紀朝鮮の喪葬礼式に発現した儀礼的な変化を捉え、祈祷文の祈祷の対象と目的、それぞれの伝統の志向するところがどのように取り込まれているのかを明らかにしようとした。儒教の喪葬礼式では肉体から分離された靈魂が神主に安置されるよう死んだ人に向けて祝文を読んだ。他方でカトリックの喪葬礼式では神と聖人を頼り、訴え、死んだ人が犯した罪を許してもらえよう請い、煉霊のために祈りを捧げた。このように祈祷の対象が転換した背景は二つの伝統の喪葬礼式の目的と来世観の違いに起因しているものと見られる。また、祈祷文に含まれている来世観を通じて、儒教が当時人々に具体的に提示していなかった死後の世界を、カトリックがどのように描いていたかを確認することができた。

祈祷文は儀礼の実践様式を記録したテキストであるという点で、儀礼研究において重要な研究対象である。しかし儀礼研究は主に儀礼の一般的な手順を対象にする場合が多い。祈祷文は儀礼の志向が込められた様式であるという観点から、今後祈祷文に関する研究がより活発に実施されることを期待する。

参考文献

- 간행자 미상. 『천주성교례규』, 1864.
- 이재(李穡). 『(국역)사례편람』, 이종찬 국역. 서울: 이화문화출판사, 1992.
- 최종성. 「조선시대 생사관과 사자의례: 사자의례의 동인과 지향」, 『韓國人と 日本人의 삶과 죽음』, 동북아역사재단·한일문화교류기금 편찬. 서울: 경인문화사, 2015.
- 유권중. 「유교의 상례와 죽음의 의미」, 『철학탐구』 16 (2004): 5-32.
- 이완희. 「Dies Natalis(天上誕生日)의 전례를 위하여: 한국의 천주교, 불교, 유교의 장례예식 비교연구」, 『누리와 말씀』 24 (2008): 156-194.
- 이용주. 『죽음의 정치학: 유교의 죽음 이해』, 서울: 모시는사람들, 2015.
- 허윤석. 「1614년 『로마예식서(Rituale Romanum)』에 비추어 본 『천주성교례규(1864)』의 장례에 관한 고찰」, 박사학위논문, 가톨릭대학교, 2014.
- _____. 「한국 천주교 상제례(喪祭禮) 문화의 토착화(土着化)」, 『司牧研究』 10 (2002): 148-182.
- 황영삼. 「한국천주교'상장예식'과 한국전통상장례에 나타난 죽음이해」, 석사학위논문, 대구가톨릭대학교, 2005.
- Le Goff, Jacques. La naissance du Purgatoire. Paris: Gallimard. 『연옥의 탄생』, 최애리 옮김. 서울: 문학과 지성사, 1995.

(翻譯責任者: 柳俊熙)